

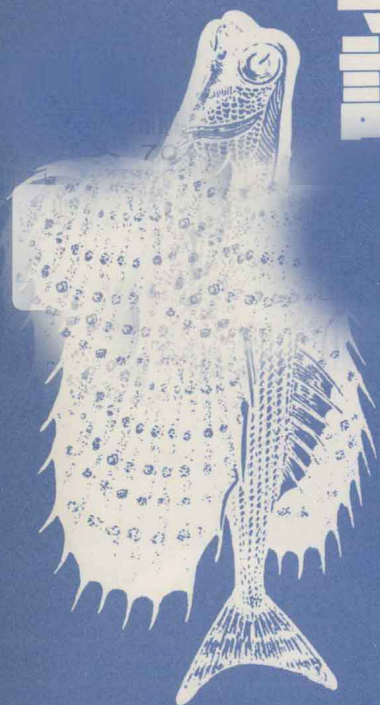
理科系の文学誌

荒俣宏

工作舎

理科系の 文学誌

荒俣宏



の文学誌 ■

一九八一年六月一五日 第一刷 一九八二年四月一日第三刷

荒俣宏

宮野尾充晴

アル・デザイン 海野幸裕

第一印刷株式会社＋杜陵印刷株式会社

製本 田中製本印刷株式会社

発行者 中上千里夫

発行所 工作舎 東京都渋谷区松涛2-21-3 〒150 phone : 03-465-5251

ブロード・宇宙文学の系譜

a 文学にとつての宇宙

b 系譜と連結

c 新世紀への投影

PART 言語の宇宙へ

ケース『バベル』17

a 善意のへびがが必要な理由について

b デカルトの凡ミスと言語について

c 言語の謎についてのSF的事例

d 完全言語のこわし方

e 理想言語をもとめる人々の心得

ケース『ガリバー旅行記』

a 柿本人麻呂からスウィフトへ

b 暗号をめぐる三人の奇妙な関係について

c 暗号学左派のためのマニフェスト

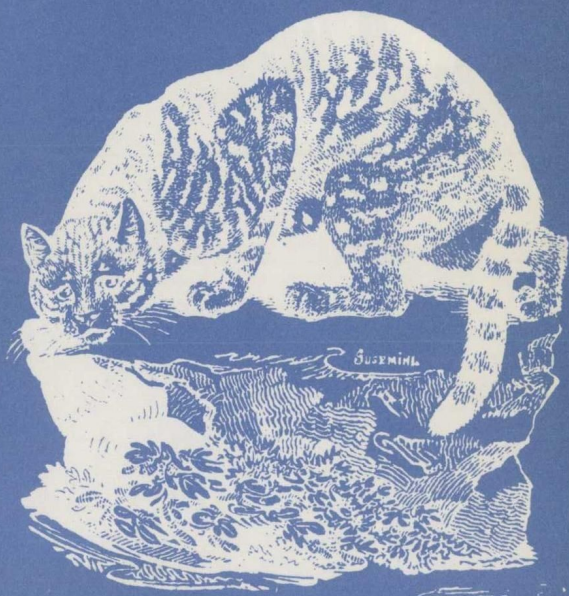
d 叛文学としての『ガリバー旅行記』

14

13

36

1



ケースⅢ『山椒魚戦争』

56

a 言語の秘密について

b 母音の宇宙的解釈

c 言語のユートピアへ

PART 2 物質の未来を求めて

ケースⅠ『結晶世界』

82

a 水晶とガラスの決定的な違いについて

b 柔かい月と堅い月

c 非対称の結晶と生命

d 生命から鉱物への旅

e クリスタリゼーション

ケースⅡ『時の凱歌』

102

a 光速という名のあこがれ

b 光はまだ見えるか？

c 光と物質のたわむれ

d ブリッシュの「光の文学化」

e 「光あれ！」

81



ケースIII『エントロピー』

122

a 映画仕掛けのオレンジ

b 思考実験の種あかし

c 思考実験は美学である

d 熱力学第二法則の意味

e エントロピーの物語化

PART 3 生命圏科学異聞

ケースI『エレホン』

145

a ダーウィン最後の冗談

b 進化論に殉じた怪人たち

c へ有機体的幸福
オカルト・フクハシネス

d 機械の書

ケースII『闇の左手』

168

a 誤解されても、死ぬよりは……

b 進化するのか、しないのか、どっちだ？

c 生物のふしぎなプログラム

d へ生涯×n倍の理論

e 『闇の左手』

f 両性具有はへ矛盾である



ケースIII『地球の長い午後』

a 植物の思想

b きわめて神秘的なインターリユード

c あしたは風をはらんで……

d テイヤール・ド・シャルタンとは何か

e へ温室あるいは植物と動物の死闘

ホットハウス

196

PART 4 二十世紀の眺望

ケースI ロシア・ソヴイェト

a ロシアはかならずしも影のなかに閉じこもっていなかった

b 時のざわめき……

c レーニンが救った西洋と、レーニンに抹殺されたロシア

d 技師メンニの場合

ケースII イギリス

a へかの忘わしき皆々をめぐるリング外の死闘

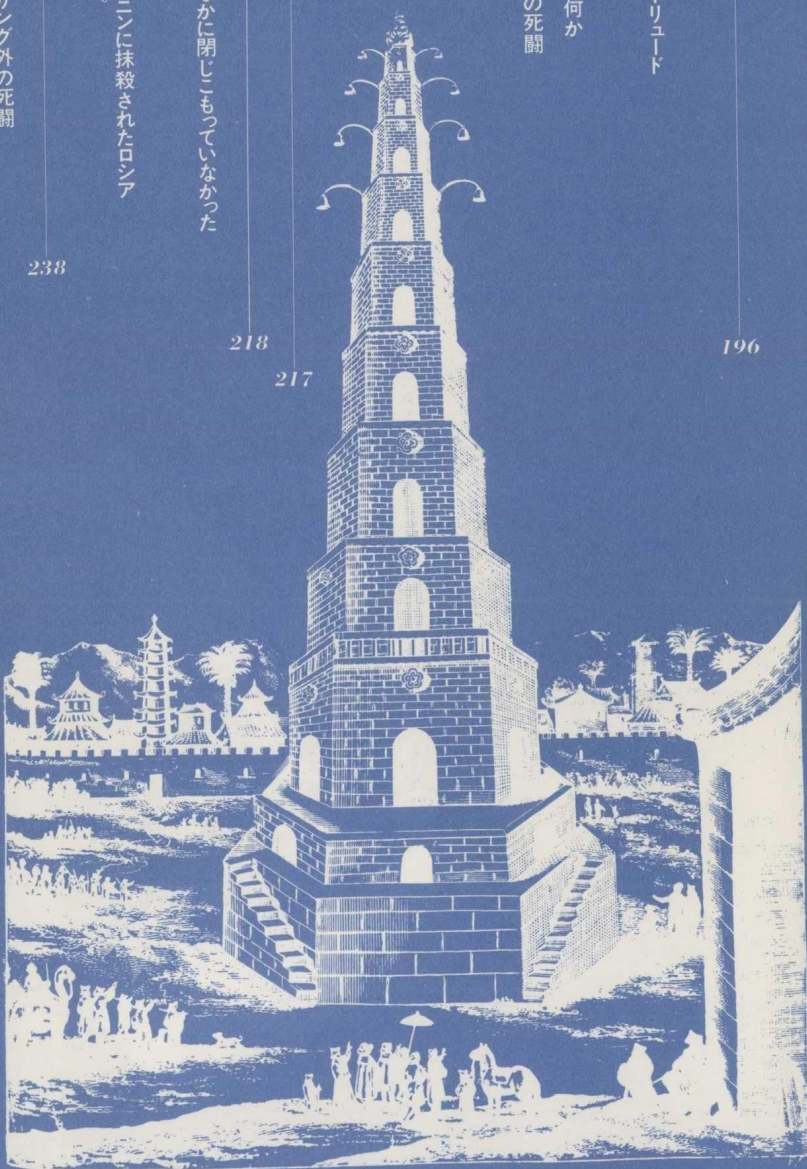
b 「反ウェルズの系譜」としてのイギリスSF

c 科学者の生理と宗教家の倫理

238

218

217



ケースIII アメリカ

a 侵略と革命

b 本土決戦

c アメリカのための利用

d SFは、かくてアメリカナイズされる

e 終章のためのエピソード

ケースIV 日本

a ソラマメと地球

b ボキャブラリーの本質

c 物理学への葬送曲

d 日本素朴派のための

260

280

PART 5 函数関係としてのSF

ケースI 作品(非A)

a 言語障害白書……

b 悲しみと忘れな草

c 言語の夢

d 『神狩り』との同調

304

303



ケースII 生物学戦争

324

a 支那のふしぎな百科辞典

b ACCとCAAの問題

c 植物もまたマルクス主義に共鳴することの実例について

d ぼくの村も戦場だった

e キリンの首とバーナード・ショー

ケースIII 文学建築論

344

a アフリカ原住民がウオークマンをつけたら、たぶん発狂することについての、一般的理由

b 文学と建築とがイコールでつながっていた時代のこと

c 黄金分割の美学

d 定型詩——ミルトンの場合

e 文学における数と形

エピソード 高い城の男、あるいは東西の融合

a この世が精神物質からできあがっていることの発見

b 西と東の合う町で

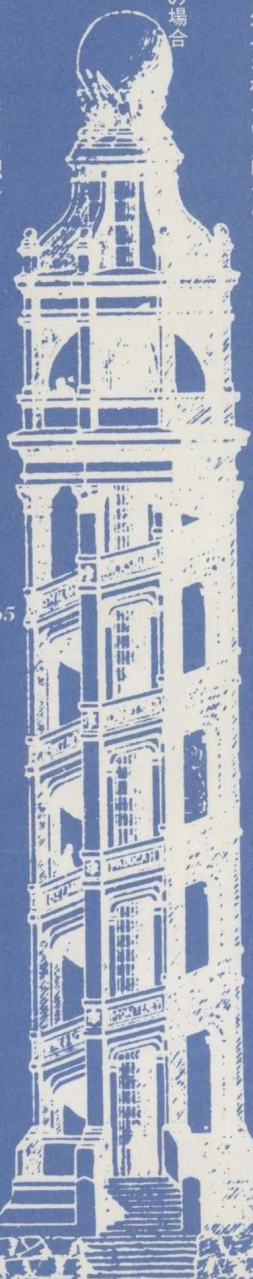
c アメリカでの事情

d 高い城の男

参考文献／あとがき

391

365



ブローグ

宇宙文学の系譜

らいた想像の論理の啓示を得て、華ひらくことになるのである。実際、十九世紀までの思弁科学は確實にその時代の〈狂気〉と〈幻想〉を産みだしたし、科学者自身があえて文学的な〈幻想〉をめざしていた節すら見られるのである。その意味から、宇宙の真実を表現する各美学の優劣を競う上で、文学が科学的空想を超えているとする所説は、おそらく狹隘に過ぎよう。俗に、SFを指して、科学と文明の未来を先取りする文学形式、と称讃する向きがあるが、これははなはだしき誤解であるといえよう。SFはむしろ、科学に寝返る〈文学〉として、長らく科学的想像力の後塵を拝する立場にあったというのが、実情である。

しかし、こう書けば、「ではなぜ、科学プロパーはSFのように奇想天外なおもしろさをもたないのか？ それほどの想像力をなぜ文芸の方面に向けなかったのか？」という反論が出てくるだろう。それに答えよう。科学の空想もまた、文学として奇想と幻想を産みだしたのである、と。科学を借りた文学というものがあれば、当然、文学を借りた科学もあるはずである。とりわけ、今日では本道を外れたとみなされる奇想科学・幻想科学のたぐいは、理科系のコンテキストから出た空想文学として読みとるべき時期に來ている。あるいは、文学として読んでさしつかえない。

なるほど、現代の常識として成立している自然科学史は、一見すると、たゆみない実験と観察と公式化の、なんとも散文的で非空想的な科学像をつねに描いてきた。しかしそれは単に「一時的」な勝利者の歴史でしかない。その勝利者に蹴落とされ、史上から抹殺されねばならなかった無数の思想的敗北者の「文学的空想」を、試みにいまもう一度開陳してみよう。『世界の和声』において重力概念



ケプラー

すれすれにまで肉薄した占星術師としてのケプラー、*Erineo* の公式であまりにも有名なアインシュタイン理論を早くも十九世紀末に予言したが、残念なことにアインシュタイン式の半分だけ——すなわち物質はエネルギーであるというテーゼだけを確信したがゆえに、「物質は存在せず」との悲劇的結論に達した、『科学と仮説』の著者ポアンカレ（かれの悲劇は、しかし「エネルギーもまた物質である」との可逆関係を説くアインシュタインにより救済されるのであるが）ら、例として挙げるわずか二人の「敗北者」の場合を眺めるだけで、前述の提言は充分な証明を得るであらう。すなわち、応用技術のための科学書として読まれることの稀れな両著『世界の和声』『科学と仮説』は、今日ひろく〈文学〉として読まれてはいないだろうか？ ケプラーの作品が今日読まれていないのは、たまたまラテン語で表記されたという、純粹に技術的な理由に拠っており、これはキルヒャーやロバート・フラッドの場合と同様である。わが国の例で申せば、寺田寅彦の場合がそうではあるまいか？ たとえ真正な科学書として参照されないとしても、寺田のそれが国民的文学として読まれてはいないであらうか？ ここに、科学書と文学書の互換方程式が成立する。そして、かかる互換式のキイワードは〈想像力〉ということになる。されば、宇宙を描く文学は、ゆめゆめ一介の言語遊戲に終始するべきではないのである。文学もまた、数学の意味において宇宙を表現する論理的な〈美学^{アイト}〉をめざさねばならぬ所以である。

b 系譜と連結

そこで、そうした理科系の文学の実例を、たとえば他天体への飛行を文学上において達成した種々

● 宇宙文学の系譜



ケプラー『世界の和声』より「惑星の和声」

の作品について、すこしばかり考察してみたい。まず、次のごとき年表をご覧いただこう。

- 一六三四——ケプラー『ソムニウム』（独）
- 一六三八——ジョン・ウィルキンズ『新世界と他天体に関する論述』（英）
- 一六三八——フランシス・ゴドウィン『月面の人』（英）
- 一六五〇——シラノ・ド・ベルジュラック『日月両世界滑稽譚』（仏）
- 一七五二——ヴォルテール『ミクロメガス』（仏）
- 一八三五——ポオ『ハンス・ブファールの冒険』（米）
- 一八五四——ドフォントネー『カシオペアのφ』（仏）
- 一八六九——ジュール・ヴェルヌ『月世界へ行く』（仏）
- 一八九八——H・G・ウェルズ『宇宙戦争』（英）

これは他天体や他天体人について書かれた十九世紀末葉までの作品をサンプリングした年表である。もちろん、多くの遺漏については寛恕ねがうとしよう。ここで特徴的なのは、各年代にまたがる作者の出身国分布状況である。まずケプラーのドイツに注目したい。ケプラーの時代は、あの奇怪な人格をもつルドルフⅡ世が世界各国から科学者、魔術師を招いてひそかな神秘科学のルネッサンスをうち樹てた時代である。当時ルドルフⅡ世の宮廷には、ケプラーやアルチンボルトのほか、遠くイギリス

死者を呼び出しているジョン・デ
ー博士



からはエリザベス一世の特命を帯びて馳せ参じたジョン・ディー博士らが出入りしていた。かかる時代精神の融合から、ケプラーの宇宙小説が生まれたのは当然である。しかも一方の英国では、ジョン・ディー博士のみちびきにより、応用科学によって新文明をうちたてることを夢みたフランシス・ベーコンが、ディー自身の書齋において、なにやら運命的に同姓をもつ修道僧ロジャー・ベーコンによる科学哲学の写本を渉猟していたのである。そしてその結果、一六三〇年前後にかけてイギリスは第一の科学的ユートピア革新運動が展開するにいたる。この時期、科学の力を喧伝するためのきわめて平易かつ刺激的な（したがって文学的にはむしろ稚拙な）宇宙文学が盛んに書かれたのであり、ジョン・ウィルキンズやフランシス・ゴドウィンらの奇怪な科学ユートピア小説は、まさにその典型であった。

しかしイギリスにおける科学派のユートピズムは、王政復古その他の歴史的展開にしたがって一時期後退し、十九世紀末に出現するH・G・ウェルズから、オラフ・ステープルドンら一九三〇年代までの新たな担い手たちによってふたたび復権するまで、停滞をよぎなくされる。しかもこのとき、科学主義そのものは、皮肉にも自己否定的な思潮に変貌して文学化されるのである。すなわち、科学によるユートピアは〈樂園〉とはなり得ないとの主張である。この間、イギリスの宇宙文学はA・C・クラークら戦後のSF作家に引き継がれるまで、「科学は人間を不幸にする」という形でひたすら呪詛的色彩を帯びるに至る。そして宇宙文学におけるこの呪詛的部分は、ジョージ・マクドナルドにはじまって、D・リンゼイの『アルクトゥルスへの旅』を経て、C・S・ルイスら神学派の反ウェルズの科学小説という皮肉なサブ・ストリームを形成するのである。一方、フランスにおける宇宙文学の

J・ウェルズ





Ｊ・ヴェルヌ「月世界へ行く」の挿絵

パターンはまさにイギリスの逆である。イギリスに興った科学主義の波は、ほぼ一世紀の時間的遅延をともなつて、エスプリの国フランスに伝播する。そのころ宗教からの解放が思想の上で実現されていた事情は、フランスにとって幸いだったと言えよう。フランスは得意の抽象思考を武器にしてイギリス型の泥くさい科学思想をいっくに洗練し、一八五〇年以降はイギリスに代わつて応用科学のチャンピオンとなる。この時期までに生産される『ミクロメガス』『カシオペアのゆ』『月世界へ行く』などの科学小説は、約二世紀前にイギリスが盛んに生みだしていた第一次科学的ユートピズムの、文学的に一層レベルアップされた同類たちである。そしてフランスにおけるその最も実り多かつた時期は、十七世紀と二十世紀に最大の科学主義ユートピストを生んだイギリスとは対照的に、ちょうどそのはざま——十八、九世紀のデカルト式合理主義時代——すなわちイギリスの全き〈逆説〉となつたのである。ジュール・ヴェルヌからウェルズへの橋わたしとは要するにそういう意義をもっていたのである。これに、アメリカとソ連の動向を加えれば、科学と文学、ならびに歴史とフィクションの相関図がさらに鮮明となるであらう。

c—新世紀への投影

ロシア・ソヴィエトは、西欧独自のイベントであつたネッサンスと宗教改革とをまったく無視した唯一のヨーロッパ国家である。そして同時に、そのためにこそロシアは〈西洋〉ではないのである。そのロシアが科学主義に目醒めたのはピョートル大帝の時代、つまりイギリスでいえばニュートン晩

年の時代であった。このとき西洋には、科学的にもっとも覚醒した二人の天才ライブニッツとニュートンが並び立っていた。ピョートル大帝はこの二人から直接忠告を得て、国内の科学的啓蒙を開始する。以後、ボルシェヴィキ革命までの二〇〇年余にわたり、ロシアの文化はニュートンやダーウィンやガウスら西洋最高の頭脳を〈輸入〉することによって発展してゆく。ゆえに、一九二〇年までのロシアにツィオルコフスキーやアレクセイ・トルストイら技術的科學主義とも呼べる文學が生まれたのは当然である。そしてその後レーニンの出現によって、ソ連の科學小説はマルクス主義SFとして独自の、しかし必ずしも文學的でない道を歩みつづけることになる。

ところで、ロシアとは別の意味でもはや〈西洋〉ではあり得ないアメリカの事情はいかがであるうか？ もともとアメリカは、泥くさい科學・技術の科學（すなわち思弁よりも実學）をイギリスにおいて支えたプロテスタント系の移民を中心に發展した關係上、抽象科學を基礎としたインテリ型の応用科學に進んだフランスに対して、純經驗的、思いつきの、あるいは職人的科學の伝統をイギリスに変わって繼承する新たな科學ユートピストの本拠地であった。その意味で、科學を學問としてよりも道具として用いた發明家エジソンは、おそらく、數式を一生涯書けなかつた直觀の人マイクル・ファラデーの血縁濃い末裔なのである。

しかしアメリカがそれだけで満足していれば、ヒューゴー・ガーンズバックのごとき初期の技術的夢想家によるダンディズムの發露としての宇宙文學が存在すれば、事足りていたろう。ある意味でアメリカを合理論と技術主義と俗物主義——あるいは、ひとまとめにして恐るべき二十世紀大資本主義